

## 野中至君の逝去を悼む

君は福岡黒田藩士野中勝良氏の長男慶応3年8月出生。福岡の近郊鳥飼村に成長した。父勝良氏は司法官出仕で前橋地方裁判所長、東京控訴院判事を歴任し、東京小石川区原町に居住されていたので長じて上京、医学に志し独乙語を専修しておられた。28歳の頃は日清戦役の後で国民の志気喚発して福島安正中佐の単騎西比利亜横断を始めとし、郡司成忠大尉の占守島越年のため報公義会を組織するあり、川上晋次郎氏はボートにて隅田川を発航し、太平洋横断を企てる等破天荒の仕事が流行した時代の事で、至君は志望の医学を棄てて我国最高峰富士山頂に越年して時代の花形たらんと意を決した。同藩の先進東京物理学校の創立者寺尾寿氏（東京大学教授天文台長）は同学校関係の中村精男、和田雄治氏に此事を諮った。和田氏は単に山頂に越年するより山頂の気象観測をしたならば意義ある滞山が出来ようと欧米高山観測の例を挙げて発議した。富士山頂では明治13年8月に東京大学御備教師メンデルホール氏が重力観測に登山した際から中村氏和田氏等が気象観測したのを始めとし、明治22年8月に1カ月間中村氏は近藤久次郎氏と山頂の一角薬師岳の石室にて観測したこともあったが、その後は他の山岳を廻りて富士山頂には手が届かずにいた。野中君も和田技師の提議を諒し、中央气象台につき気象観測の手引をうけ一通りの器械類も借りうけることができた。それで幾度となく登山私財をもって石工大工等を雇入れ、最高峰剣が峯頂上の岩窟の間に南北3間東西2間の木造小舎を建設した。これが野中氏の剣が峯観測所で28年10月に落成し観測器械を束付けいよいよ冬籠となると寝具木炭食料品など越年の資料を搬入したので、屋内にては運動する余地も少なくなったが、冽寒のため屋外の運動は出来ない。それに最初は単身越冬の予定であったのに愛妻千代子夫人幼児を郷里の父母に託して出京の上登山滞在することになったので炊事など生活上には便利になったが食住ともにきろくつになった。それで大工人夫等は孰れも下山して10日もたつと不慣の山頂生活に何分栄養と運動の不足で、夫人は浮腫を起し日々発熱になやみながら夫妻協力して漸く観測を続ける有様であったが、11月に入ると寒気更に烈しくなり風力計には霧氷附着し、これをたたき落すに違なく、電気盤に通する電池も凍結し炉辺に近づけなければならず、殊に夫妻共に扁桃腺炎で病床につくことになった。乱暴にもナイフや御箸で荒療治をして急場を凌いでいた。その間報効義会員2名郡司大尉より慰問のため、中畑村の強力を案内とし山頂に見舞に來りその症状を見て、下山を勧めたが中々応しないので、止むを得ず下山後実状を和田技師に報した。和田技師は中村台長と協議し御殿場に來り援助の計画をたて、警官三名と強力を同道して登山し、病情を見て直に下山すべきを勧めたが、至君は死を以て決行せんとし容易に応じなかった。それで和田技師は再挙推行せしむる誓をなし、両人は強力の脊に半死の状態で下山し加養することになった。爾來至君の健康勝れず中畑村に小舎を構へ居住しておられた。千代子夫人は間もなく健康旧に復したが至君は久しく病名も判然せず、明治40年冬余等が寒中登山した頃も麵食のみで露命をつないでおられた。明治30年の頃は富士観象会を提議されたが、間もなく後援の首腦を失い、明治40年には山階宮より後援賜金をいただき大正元年の頃山頂東安河原に倉庫を建設された。昭和2年に余等が鈴木靖二氏の援助を受け山頂観測所を開始した折りには氏の寓居を訪い仮設の倉庫を利用する事を快諾された。昭和6年富士山頂観測所建設の出来た頃には令息と二令嬢を伴い登山数日間滞山されたこともあった。そのとき65才の翁は青年と語り、令嬢は料理の実地指導などされたこともあった。

明治28年頃から千代子夫人と共に気象学会員になられておったが大正11年の末千代子夫人流感にて逝去後は中畑の仮寓も崩壊したので辻堂に老母両娘と共に靜に余生を樂んでおられた。その後葉山逗子と転々住居を替えられたが晩年はむしろ健康の様であった。

明治28年の富士山頂気象観測報文は気象の専門でないので、異論があつて地学雑誌（明治29年号）に登載してある。文士落合直文氏は「高根の雪」と題して冬籠の記事を明治29年明治書院から発行されたときいておる。気象集誌には明治32年から33年に数回「寒中の登嶽を勧誘す」と「寒中富士山嶺実験談」を連載してある。その頃劇場にも演出したとの事である。昭和22年には橋本英吉氏に依て「文芸春秋」と「測候時報」に富士山頂と題し富士冬籠の事蹟を叙述された。後橋本氏は補填して23年3月鎌倉文庫の単行本とした。同年新東宝では「富士山頂」として映画に作成した。

本年に入り胃癌のため療養中であつたが病状急に進み、2月28日遂に遠逝された。享年88才、天寿を完うされたと云へよう。3月3日晋羽護国寺先塋に葬られた。中央气象台と富士山測候所と花環一對を捧げ関係職員も多数参列し、和達台長と藤村所長が弔詞を捧読された。余等の事業君の跡を追う点もあつたが、遂行の起点と業績は全く系統を異にし所見をたたかわしたこともあつた。今や幽明境を異にし、謹みて業績を記述して君の冥福を祈る。

（佐藤順一謹誌）